

## 『アベノミクス批判 4本の矢を折る』を読む

経済学者の伊東光晴先生の近著である。岩波書店から7月30日に出版されたが、11月にはもう6刷である。よく売れている。同じ頃に拙著『災後の新聞』を出版したので、この売れ行きは羨ましいかぎりだ。

はしがきに「私は倒れて以後リハビリ中で、執筆も思うようにいかないが続いている」として、本書の第2・4・7章は口述速記によるとある。

本書は安倍首相の経済政策、3本の矢を事実にもとづいて詳細に批判する。そして安倍首相のかかげている経済政策は、そのいずれも誤りのものと断ぜざるを得ないものである。だが安倍首相が意図するところは、経済に重点があるのではなく、政治であり、戦後の日本の政治体制の改変こそが真の目的である。これが「隠された」第4の矢であるとする。

まず3本の矢からみていこう。第1の矢—量的・質的緩和は、株価の上昇にも為替の変化にも何の関係もない。株価が大きく上昇したのは外国ファンドの買いのためであり、リーマン・ショック以後落ちた欧米の株価が低金利政策もあって上昇し、元に戻し、残る市場である日本に向かったのである。第2の矢—国土強靱化政策は、予算化されていない。2014年度予算案の検討からこれを明らかにした。第3の矢—経済成長政策は、具体化の姿が見えない。何よりも、その時代でないのは、第4章「人口減少化の経済」で明らかにした。何よりも「安倍首相の現状認識は誤っている」と。

いま、日本経済にとって大切なことは、財政問題と労働市場の改革である。先進国中最悪の財政赤字をつづけながら、それを先送りしている。財政赤字は口を開いたまま、まさに開いた口がふさがらないのである。加えて若者から人間的生き方を奪いかねない労働市場を改革しようとする政治がない。

「従来自らに課していた経済の枠を超えて」書かれた第7章「安倍政権が狙うもの」は、先生の強い思いも伝わってきて読み応えがある。安倍政権の軸は「右に移った」として、「尖閣列島問題に冷静な心を」求める。戦争責任やアメリカ右派外交についても言及し、最後に安倍政治を厳しく批判する。彼の目指すものは、彼が口にする「日本を取り戻す」「戦後レジーム（戦後体制）からの脱却」の中にある。彼のいう戦後レジームとは平和憲法が意図した平和国家であり、憲法9条を改正し、軍隊を認め、交戦権を認めることにする—祖父岸信介の果たせなかったものを実現しようというのである。彼はそのための布石を一步一步進めている。

(2014年12月20日)

